

2-1 検証結果【検温スペース】

検温手順の検証

1. 検温スペースの設置場所

学校周囲にフェンス等がないため、徒歩避難者が、校門を通らずに直接、体育館入口へ集まる可能性があり、グラウンドを駐車場として運用した場合、直接、体育館入口へ集まる可能性があることから、検証では、校門前ではなく体育館前に設置した。

靴の脱ぎ履きは感染リスクを高めるため、靴を脱ぐ前の場所に検温スペースを設置した。

避難所の構造上、入口を1カ所にするなど、動線をまとめることができれば、敷地入口付近の設置も検討する。

2. スタッフの防護

多くの避難者と接する場所であり、体調不良者との会話も想定されることから、マスク、目の防護（フェイスシールド等）を着けて対応した。

避難者がマスクを付けた状態で検温できるように、避難者用マスクを検温の手前に配置した。

車両での避難者には、入口で体調不良者受付を説明しているため、1名のみガウン（ゴミ袋代用）を着て検証した。

※ 眼鏡やエプロンでの代替の検討

猛暑時ではガウンの内側に熱がこもり、寒冷時にはフェイスシールドが曇るなどにより、ストレスが高くなり、集中が途切れ、安全への意識が薄れ、着用しなかったときよりも安全性や作業効率が下がることがある。

検証においても受付対応や清掃の際、フェイスシールドの内側が曇って見えにくくなったとき、無意識に手でフェイスシールドの内側の曇りをぬぐっている場面が見られた。

また、ゴミ袋の内側が蒸れて服が体に張り付き、清掃中のゴム手袋のまま、内側の服を触る場面も見られた。

公益社団法人日本医師会「新型コロナウイルス感染症時代の避難所マニュアル第1版」によると、ゴーグル、フェイスシールドは目を覆うものであれば眼鏡でも代用は可能（ただし、再利用のものは使用後に適切に消毒を行う）とされており、また、ガウンについてもエプロンなどでの代用は可能だが、腕部分が露出するため、汚染されても洗浄できるよう肘から下は衣類を含めて何も身につけないことが望ましいとされている。

個人の判断で防護を選択させるのではなく、災害対策本部と保健医療調整本部と連携し、防護服等を着けることでのストレスと作業内容や安全面のバランスを検討して、防護の種類とその場合の注意事項を指示する必要がある。

3. 原則、検温スタッフと避難者は、物のやりとりはしない

検温スタッフは、1人で多数の避難者の対応を行うため、次々に感染を拡大させるリスクがある。

そのため、検温スタッフは、非接触型体温計での計測と体調不良の聞き取りのみを行い、避難者との物のやりとりや触れる機会を無くした。

4. 掲示物、設置物

並んでいる場所：「ソーシャルディスタンス」

検温スペース入口：「検温スペース」、「セルフチェック（症状一覧）」、「アルコール消毒液」
「マスク（代用マスク可能）」

検温スタッフ前：「体調不良者専用スペースまでの動線地図」

検温スタッフ後：「発熱者の方は校舎へ」

5. 検温スペースでの避難者への声掛け

大声を出さないようメガホンを使用した。

「こちらで検温を行います」

「世帯毎、1列に並んでください」

「セルフチェックの症状や具合の悪い方は、校舎で検温してください」

「手の消毒をしてからマスクを付けてください」

「健康セルフチェック表は、体育館の玄関で受け取ります」

「38度です。発熱の症状がありますので、専用スペースへ誘導します」

「並んでいる方とお互いに2mの距離を空けながら移動しましょう」

6. 受付での避難者への声掛け

受付では健康チェック表や避難者名簿のやりとりが生じるため、検温スペースでの健康状態の聞き取り後の体育館風除室に受付を設置した。

「書類はこちらで受け取ります」

◎チェック1『健康セルフチェック表』を確認

「ご家族に体調の悪い方はいませんね」

◎チェック2『避難者カード（名簿）』を確認

「大人2人世帯ですね」

◎場所の指定『滞在場所No.○』、『滞在場所No.○』を渡す

体育館内レイアウトを示して

「では、この番号のところに待機してください」

「そちらで靴を脱いでください」

「体育館の中に避難所ルールの表示がありますので、確認をお願いします」

※「北海道コロナ通知システム」や厚生労働省の「新型コロナウイルス接触確認アプリ」などを活用し、避難所閉鎖後の感染状況の周知についても検討する。（本検証では実施せず。）

7. 徒歩避難者の対応

検温スペースを通過した時点で、基本的には体調不良者ではないと一応の判断をする。

車両ではなく徒歩で避難してきた場合は、健康セルフチェック表を持っていないため、受付で健康セルフチェック表、避難者名簿を配布し、体育館内のスタッフが回収する旨を伝え、体育館内に誘導する。

8. 検温スペース以降の健康状態の確認

体調変化の早期把握は、まん延防止の要であり、避難者にも理解と協力を得るよう努める。

検証では、食事を健康セルフチェック表と交換することで健康状態の把握を実施した。

また、新型コロナウイルスへの不安から差別・隔離等を気にして体調不良の申し出が少ないことも想定し、保健師等の巡回相談のほか、目で見えて分かる症状（咳、苦しそうな呼吸など）のある避難者には、他の避難者に配慮しつつ声掛けを行うなど、検温スペース以降も継続して健康状態を確認する。

専門家の指導・課題

1. 感染防止の基本の実践

避難所では、全ての場面において、ひとり1人の行動として感染防止の3つの基本「身体的距離の確保」、「マスクの着用」、「手洗い」を避難所にいる全員が実践することが重要である。

また、避難所運営としては、3密の回避が求められ、密集回避のための「人数把握」、密接回避のための「レイアウトの工夫」、密閉回避のための「換気」の実践が重要である。

2. 配布マスクを介した感染拡大防止

検温前にマスクを付けるよう促し、箱に入ったマスクを置いていたが、避難者が間違っ2枚目のマスクに触ってしまうと、そこも感染を広げるリスクとなる。

可能な限り個包装のマスクを検討した方が良いが、できなければ、ラップなどを使用して1枚ずつ交互に挟んで2枚目に触れないようにしたり、『マスク中央部をつまんでお取りください。2枚取れたら戻さずにお持ちください』のように注意書きを付けるなど、マスクを介した感染防止も検討する必要がある。

3. 確実な人数把握と共有

体育館の避難人数の把握は、密集を回避する上で重要な情報であり、受付でのチェックと併せて災害対策本部やスタッフ間での共有方法も重要である。

4. 体温計など共用物品を介した接触感染防止

検温スペースや避難所内に体温計や血圧計を設置した場合は、接触感染のリスクが高まることから使用の前後に自ら消毒するよう注意書きも設置する。

5. 発熱者の誘導動線での感染防止

検証のレイアウトでは、検温待ちで並んでいる避難者と発熱者が移動する動線が重なった。

発熱者の誘導員を1名配置し、発熱者と避難者の距離を2m以上空けるように声掛けしながら誘導し、接触を回避する必要がある。

6. 雨天を考慮したスムーズな受付

大雨や強風を想定し、検温場所で滞留しないようスムーズな配置を検討する。

また、必ずテントが設置できるわけではないので、テントが設置できない状況も検討しておく必要がある

7. 上履き（スリッパ）持参の確認

受付でスリッパや上履きを持ってきているか確認し、「玄関で使用する」と予告することで、玄関先での渋滞できるだけ緩和するような呼び掛けを行ってもよい。

8. 検温テント内の消毒での滞留

非接触型体温計での検温は、スムーズに進んでいたが、消毒液の場所で滞留が発生していた。

滞留が発生すると、心理的に前の人を追い抜こうとしてしまうため、可能な範囲で、消毒液と検温場所を離して距離的な余裕を設けたり、開設時だけアルコール消毒薬の設置場所を増やすなど、滞留防止を検討する。

9. 入口と出口の動線

出入口でのすれ違いは、接触感染のリスクがあるため、出入口が2つある場合には、入口と出口を指定することで接触感染のリスクの低下を図ることができる。

10. 緊急用トイレの設置

トイレを我慢している人は、並ばずにトイレに駆け込んでしまうことも多く、おそらく、それを止めることも難しいため、できれば検温スペースの手前に仮設トイレがあると、駆け込み等を原因とする感染を防ぐことができる。

2-2 検証状況【検温スペース 受付配置図】

